

無言館

戦没画学生慰霊美術館

未来へ思いをつなげる
長編ドキュメンタリー映画

乾かぬ絵具

六十年も経つというのに
あなたの絵具は
ちっとも乾いていない

あなたの描いた絵の架は
まるで 昨日の夕日を見るように
鮮やかで 美しい架だ

あなたの描いた一本の線は
まるで あの日のあなたの決意を見るように
真っすぐで ためらいのない線だ

六十年経った今も
ちっとも乾いていない あなたの絵具は
あなたが今も そこに生きていることを
私たちに教えてくれる
鮮やかな 生命の色だ

乾かぬ絵具よ
今も 少しも色褪せぬ
あなたの一滴の生命よ

「無言館」監主 窪島 誠一郎

お話し
「無言館」の絵に想うこと
窪島 誠一郎



企画・製作：新映株式会社 配給：共同映画全国系列



「生命の証」をきざみこんで戦地に送った若者たち「無言館」それは愛の美術館



市瀬 文夫

福井県出身、東京美術学校卒業、戦時、戦中50歳で入軍、519年2月ニューギニアにおいて戦死、享年29歳。

文夫は東京美術学校を卒業して卒業した、だれもがみとめる、死んだ天才の持主だった。あの戦争がなければ立派な絵師さんになっていたかも知れない。



日高 安典

鹿児島県種子島出身、東京美術学校卒業後、入軍、満州からルソン島へ転送、520年4月、戦死、享年27歳。

あと五分、あと十分、この絵を書きつけていたい、生きて帰ってきたら必ずこの絵の続きを描くから……とモデルをつとめてくれた恋人に言い残して戦地に送った。

無言館

— 戦没学生理想美術館 —



解説 長野県上田市、国や山々に囲まれた田舎の丘の上に、ひっそりとたたずんでいる小さな美術館「無言館」。

参りついた「無言館」の扉を押すと、志を棄たすことなく戦地に赴いた戦学生たちの声が聞こえてきます。絵師になりたいと願いながら、一枚の両面、一面のスケッチ紙に「生命の証」をきざみこんで戦地に送った若者たち。

「無言館」館主窪島誠一郎さんは、その戦学生たちの遺した作品、遺品を全国各地に訪ね、収集しました。描きかけの絵からは、「人が人を受すること」、「生命あるすべてのものを愛すること」への願いが、身かじつたわってきます。「無言館」はそういう美術館なのです。「この時代だからこそ、彼らが生きていた証を守ることで、いのちの大切さを、戦争を知らない世代に伝えていかなければならない」と窪島さんは語ります。

開館以来、「無言館」では毎年八月になると、彼らの無念を弔う慰霊型「十本の絵筆」の展覧会がこなわられます。



企画制作	窪島 誠一郎	監修	窪島 誠一郎	制作	神澤 文
総監	窪島 誠一郎	演出	窪島 誠一郎	脚本監修	窪島 誠一郎
監督	窪島 誠一郎	演出	窪島 誠一郎	監制	窪島 誠一郎
製作	窪島 誠一郎	演出	窪島 誠一郎	演出	窪島 誠一郎
脚本	窪島 誠一郎	演出	窪島 誠一郎	演出	窪島 誠一郎
演出	窪島 誠一郎	演出	窪島 誠一郎	演出	窪島 誠一郎
演出	窪島 誠一郎	演出	窪島 誠一郎	演出	窪島 誠一郎
演出	窪島 誠一郎	演出	窪島 誠一郎	演出	窪島 誠一郎
演出	窪島 誠一郎	演出	窪島 誠一郎	演出	窪島 誠一郎
演出	窪島 誠一郎	演出	窪島 誠一郎	演出	窪島 誠一郎
演出	窪島 誠一郎	演出	窪島 誠一郎	演出	窪島 誠一郎
演出	窪島 誠一郎	演出	窪島 誠一郎	演出	窪島 誠一郎
演出	窪島 誠一郎	演出	窪島 誠一郎	演出	窪島 誠一郎
演出	窪島 誠一郎	演出	窪島 誠一郎	演出	窪島 誠一郎
演出	窪島 誠一郎	演出	窪島 誠一郎	演出	窪島 誠一郎
演出	窪島 誠一郎	演出	窪島 誠一郎	演出	窪島 誠一郎
演出	窪島 誠一郎	演出	窪島 誠一郎	演出	窪島 誠一郎
演出	窪島 誠一郎	演出	窪島 誠一郎	演出	窪島 誠一郎
演出	窪島 誠一郎	演出	窪島 誠一郎	演出	窪島 誠一郎
演出	窪島 誠一郎	演出	窪島 誠一郎	演出	窪島 誠一郎

©2019 株式会社神澤文 0118-20118-011-2620 FAX 0118-20118-011